

中村真一郎
福永武彦

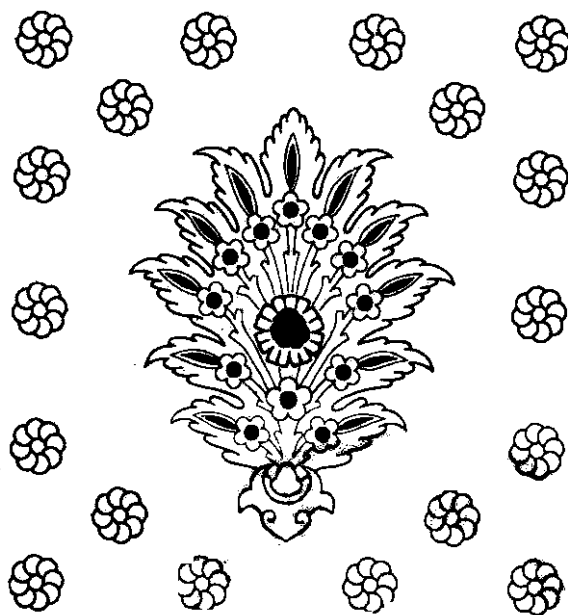
日本文学全集



日本文学全集 81



中村真一郎
福永武彦



集英社

日本文学全集

全88巻



81 中村真一 福永武彦 集

昭和四十八年七月八日 初版
昭和五十六年十月三十日 六版

著者 中村真一 福永武彦

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〒 東京都千代田区一ツ橋三丁目

電話 出版部 東京(四)六三三

販売部 東京(四)三五二

印刷 大日本印刷株式会社

著者との了解により後印廃止いたします。
整丁本、乱丁本はお取りかえいたしません。

編集委員

伊藤 整
井上 靖
中野 好夫
丹羽 文雄
平野 謙

装 幀
押 絵

後 藤 市 三
竹 谷 富 士 雄
野 口 弥 太 郎

目次

中村真一郎集

熱愛者	七
感情旅行	三二
生き残った恐怖	五五
水の女王	六二
福永武彦集	
告別	九六
塔	一〇三
死神の馭者	一〇六

鬼	508
死後	519
世界の終り	531
魔市	559
注解	571
作家と作品	579
年譜	595

佐々木基一 579

中村真一郎集

夢は才の

人生である

中村真一郎

熱愛者

第一章

1

その時、私は友人の新聞記者、久我山と有楽町の人混みのなかを、話しながら歩いていた。

たしか、近いうちに開かれる、ある演奏会形式のオペラの公演のことが話題となっていた。その公演で主役をやる千坂牧子が、私と特別の関係があることは、久我山も知っていたから、そんなことで、歌手としてだけでなく、女性としての彼女のことも、久我山は好奇的に私に質問していたような気がする。

すると、久我山は不意に、ひとりの男に呼びとめられた。

「よお、久我ちゃん」

と、その男は馴れなれしく呼んだ。

それから近寄ってくる、

「この間の、おれたちのクルーパンのこと、早く記事にしてくれよ」

と言った。

久我山は生返事しながら、ポケットから煙草の箱を出した。すると、その男はいきなり手を延して、久我山の煙草の箱に指を挿けた。久我山は露骨に嫌な顔をしたが、結局、一本、抜き取られた。

「おれ今、この緒方と仕事の話をしているんだ。明日でも、社に連絡してくれないか」

と、久我山は煙草をくわえたまま、その男に言った。

その男は私の方を振り向いた。眼が充血して、不養生な生活をしている男らしく見えた。

その男はマッチをすすると、自分が先につけ、それを久我山の顔のまえに持つていった。

それから、

「じゃあ」

といって、気軽に私たちから離れた。そうして、二二間先の喫茶店のまえに立っている、若い女のところへ歩み寄った。

その女は私たちが見ているのを知ると、黙って頭を下
げた。感じのいい女性だな、聡明（さうめい）そりな女だ、と私は思
った。

女と男はそのまま、その喫茶店のなかに消えた。

「あの男は何だい」

と、私は歩きだしながら訊いた。

「妙な奴でね。友成浮って男なんだが、いつも訳のわか
らないことをやっている。今度、女ばかりの室内装飾家
のグループを作ったんだ」

室内装飾という仕事は、戦後はおおいに有望なので、
たとえばデパートや大きな商店の飾窓の飾りつけのよう
な仕事から、また建築家と組んで住宅の部屋の模様なども
考察する。そういう設計のような、デザインのような
仕事を、若い女性たちはかなりのグループがこれから店開
きをしてやろうというので、——その仲間には大学の建
築科を出たものもいれば、女流画家の卵のようなものも
いるし、洋裁屋もいるという雑多な真合だが、そのなか
から、たしかに新しい何かが生れてくるものと期待され
なくもない。

「ただ——」

と、久我山はつけ足した。

「あの友成という男が、それとくつついたのが気に入ら

ない。なるほど、あの男が関係すれば資金もできるし、
マネージメントもうまくいくことにはなるだろうが、何
しろ強引すぎる奴でね。うちの文化欄に、そのグループ
の紹介記事を書いてくれと持ちこんできたんだが、それ
が例によって、しつこすぎるんだ」

「君、あの男と、どの程度、親しいんだね」

と、私は訊いた。

「何、めったに会いはしない。それも仕事の関係でね。

——いつも向うから押しかけてくる。いかにも親しそら
にするのが、あの男の癖なんだ」

「癖というより演技なんじゃないか」

「そうなんだよ。だから、厭（いと）になるんだ」

そう言って、久我山は手にしていた煙草の吸殻（すびら）を道端
に捨てた。

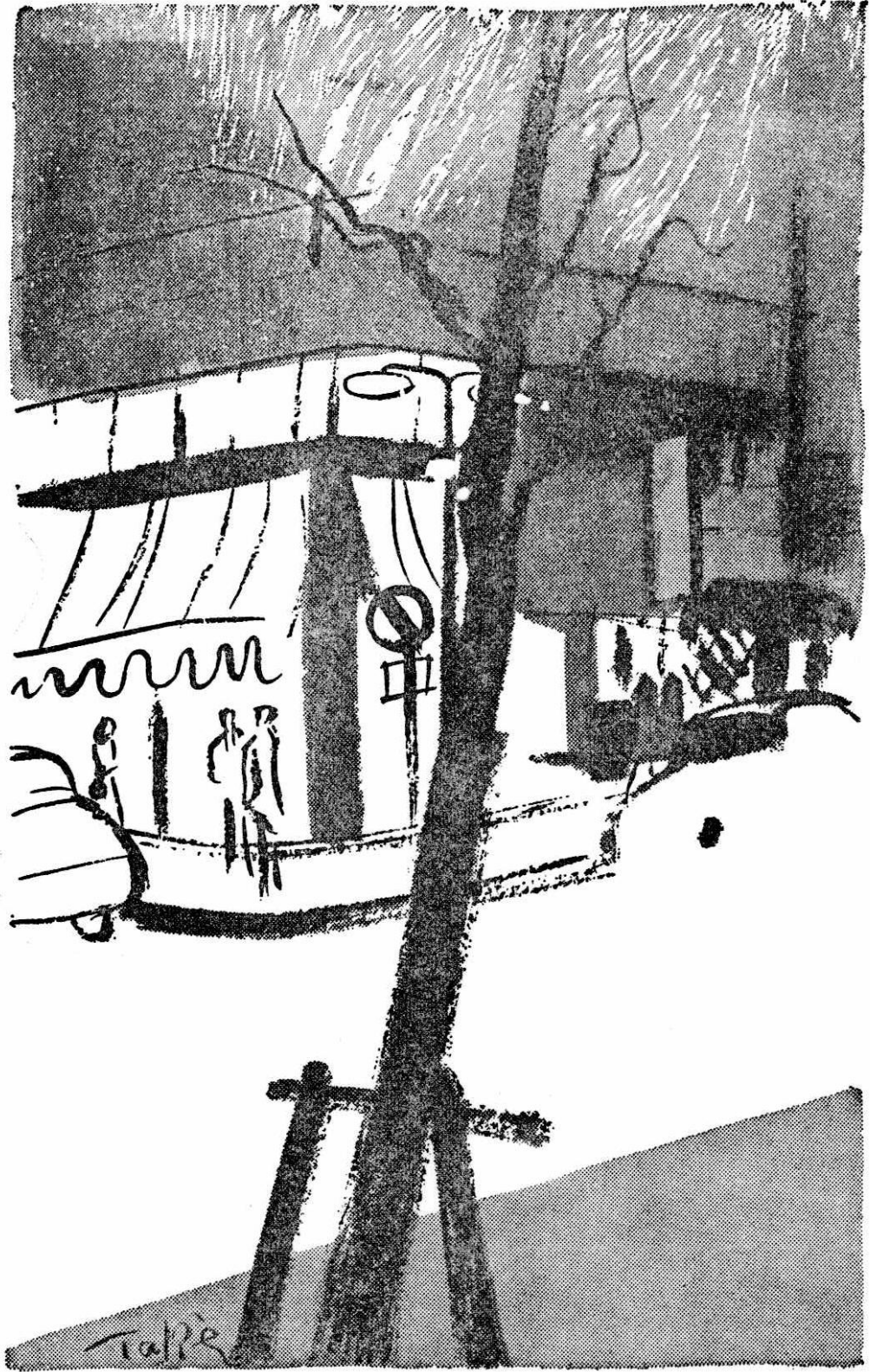
そのとき、歩道の端に片足をかけて、大胆に靴下を直
していた若い女性が、そのままの姿勢で、軽く頭を下好
ながら、笑顔を見せた。

「おや、さっきの男とってしよにいた女じゃないか」

と、私は言った。

「そりだよ。あれがつまり、そのグループの一人、女流
室内装飾家というわけだ」

と、久我山は答えた。



「それにしても、今、喫茶店に入つていったと思つたら、もうこんなところにいる。素早いね」

と、私は笑つた。

「それが友成流なんだよ」

と久我山も笑い声を立てた。

その女はもう人混みのなかに消えていた。私は美しい女だな、と今度は思つた。

2

それから私は、久我山を案内して、ある楽器店の二階の練習場へ行つた。

ピアノが幾台も壁に寄せて列べてある、その階段は売場を兼ねている練習場では、いま、さつき久我山と話題になつていたオペラの稽古が進行中だった。

指揮者の村井が胸をはでに振るにつれ、ひとかたまりになつた合唱団が、いつせいに大きく口を開けているのが見える。その声は部外の私たちには、雑音のように、いたずらにやかましいばかりだった。

「これで、一週間後に公演なんだね。だいじょうぶなのかね」

と、久我山は私に訊いた。

「もっと小さな声で話せよ。……なに、これでもステ

ジに立つて唱うのを、客席で聴けば、ちゃんと歌になつてているんだ」

と、私は答えながら、場内を見廻した。

「そんなものかね」

と、今度は久我山も声を潜めて呟いた。

合唱はひとまず終つた。壁ぎわに立っていた主演の千坂が、真中へ出てきた。

顔色が悪いな——と、私は思つた。私は三日ほどまえ、彼女が自分の部屋で、例によつて、ちよつとした喉血をしたのに立ち会つている。だいじょうぶだろうか、むりをして、……しかし、今度の公演は彼女の久しぶりのステージだから、彼女もおおいに意気込んでいるのだ。私は危惧の眼で彼女を見守つていた。私情だけでなく、音楽評論家という職業のうえからも、私は彼女の今度の再起に期待していた。だから、彼女がむちゃな私生活によつて、長い胸の病気を、あいかわずこじらせているのが腹立たしかつた。いい加減に、心配なして歌を聴いていられるようにしてもらいたいものだ。——そういう怨めしきの気持も、私の危惧の念のなかには、まじつていた。

千坂は手にしていた楽譜を、そばにいる仲間にあずけると、村井の指先の合図で歌いはじめた。

むりに強い声を出している。と、私は感じた。しかし、久我山は、

「なかなか声量があるじゃないか。もう、すっかり病気はなおつたらしいね」

と、安心したように言った。

「いや……」

と、私は口ごもった。が、千坂の歌いぶりは、しだいに調子が乗ってきた。

「さすがに千坂牧子だな。戦後派とは違う」

と、また、久我山が感嘆した。

私は目を閉じて、彼女の歌に身を任せていた。生身の彼女と、このオペラの役の性格とが、奇妙にひとつに入り混つて、私には感じられた。

突然、歌の調子が狂った。と思うと、彼女は激しく咳きこみはじめた。私は思わず前へ走り去った。村井が振り向いて、私に気づいた。それから、村井は指で千坂に練習の中止の合図をした。千坂はかろうじて咳を止めると、続けようという仕事をした。村井は掌を前に出して、なだめるような始末をした。

千坂の眼が私の眼と会った。咳いた現場を見られたことから来る、怒りの表情がその眼に現れた。何という強情だ、と私の胸のなかにも、憤りが湧いた。

久我山が、そうした私の肩を掴んで、向きなおさせた。私はことへ彼を連れてきた用事を、ようやく思いついて、指揮者の村井に久我山を引き合せた。

「今度の公演についての抱負をお聞かせ願いたいんです」

と、久我山はすぐはじめた。

村井は眼鏡の奥で笑いながら、

「このオペラについては、すべて緒方君に教わっているんで、抱負といっても……」

と、口籠った。

その時、私の背は、誰かの指先で激しく突かれた。千坂牧子だ、と私はすぐ判った。私はそこに久我山と村井を残したまま、部屋の隅へ歩いていった。予想どおり千坂もついてきた。

私はピアノに片手を掛けて、彼女と向い合った。彼女の眼には、まだ怒りがくすぶっていた。

「どうして、昨夜、来なかったの？」

と、彼女は隣いた。その声は小さかったが、調子のとげしきが、私を傷つけた。

「だって、行かれないうって、おとしい言つてあつたじゃないか？」

と、私は邪険に答えた。

「私の身体のこと、心配なら、ちよつとぐらい来るかと思つたわ。昨日はあなたのいうとおり、おとなしく寝ていたのに」

それから彼女は、ちよつと足許を見下して、黙っていたが、またきゆうに顔を上げた。その眼が新しい怒りのために、またきらりと光った。冷たい眼だ。しかしそれにもかかわらず美しい眼だ、と私は瞬間、動揺した。「私のところへ来なかったのに、ここには現れたそうじゃない？」

と、彼女はいらだたしげに言った。

私はしかたなくうなずいた。弁解が彼女をいよいよ怒らせることを、長い厭な経験で知っていたから。「あなた、ノブエに逢いたくて、ここへ来たんでしよう」

と、彼女は毒のある口調で言った。

私は、ああ、また、例の焼きもちか、と思つた。一度に胸のなかが重くなった。もうたくさんだ、と、私は口のなかで言った。それから、私をしつこく見詰めている、彼女の視線を外らすために、わざと横を向いた。

案外、近いところに村井と久我山とが立っていた。村井は私と顔が合うと、

「千坂君の身体、やっぱり心配でね」

と、言った。

「だいじよりぶです。ステージのうゑで死ぬんなら本望です」

と、彼女は鋭く言い返した。

「また、そんなおおげさな」

と、村井は苦笑した。

「私が死んだら、緒方さんが名文で葬ってくれるわ」

彼女は私の胸を刺すような笑い声を立てた。

「おれ、失敬するよ」

と、久我山が困つたという顔つきで言った。

「ぼくも帰る」

と、私は村井に手で合図すると、さつさと歩きだした。

背後に、千坂の意地の悪い言葉を予想していたが、階段のところへ着くまで、とうとう彼女の声は聞かないですんだ。

3

戸外は完全に日が暮れていた。

「千坂敦子つて、なかなか気が強いんだな」

と、久我山は鋪道のうゑに立つたまま、向う側のネオンを見上げて言った。

「気が強くて、嫉妬ぶかくて……ぼくはもう、つくづく

厭定」

その私の声の調子が、ひどく沈んでいるのに驚いたらしく、久我山は私を振り返った。

「むやみと競争心ばかり強くて……」

彼女は戦前には、その仲間の中で、自分の地位を高めるために、ほとんどあらゆることをした。勉強も激しかったが、スキャンダルを起すことも辞さなかった。彼女の同輩や先輩は、何人も彼女のために傷ついて、仲間から離れていった。彼女は事實上、その小歌劇団の第一歌手となった。

それから戦後となった。今度は彼女は若い有望な歌手が出てくることを、警戒しはじめた。彼女が後輩を意地悪くいじめるという噂が広まった。

このところ、彼女のそうした可哀そうな犠牲者は、まっつき、彼女の口からその名前が出た、雪山ノブエだった。

「君、ほんとにその雪山ノブエに気があるんじゃないのかい」

と、久我山は笑った。

今度のオペラでは雪山は千坂の激しい反対で、ごく小さな役しか与えられていなかった。しかし、万一、千坂が休場というようになれば、雪山がその役に代る

ことは、もう既定の事実だった。

昨日、私が練習場へ来たのも、その件について指揮者の村井に話すつもりだったのだし、村井も千坂の暗血を知るとすぐ、雪山のために、その役の特別の練習を開始していた。

だから千坂の雪山に対する反感は、切実なものだった。その反感を、彼女の虚栄心は芸術上のものから、恋愛上のものへ、むりに転換させて、自分を納得させようとしているのだ。その直接の被害者となるのが私だったから、私は二重にやりきれなかったわけだ。

「だが、雪山ノブエに君が本当に気があるというニュースも、おれのところには入っているぜ」

と、久我山は毒のない笑い声でつけ足した。

私たちは人混みのなかを、押し分けるように歩いてた。

もう、こんな心理的なもめごとはたくさんだ、と、私は思った。私の心は暗かった。どうして、あの千坂牧子という女は、いつまでも嫉妬を押えることを覚えないのだ。そうして、有望な新人が現われるたびに、私をその恋人だと信じこむという病気も、いい加減に治ってくれなくては……

その時、どうした偶然か、私はふと夕方の鐘遣の片隅

で、上半身を折り曲げて、靴下を直していた、あの室内装飾家だという娘のことを思い出した。私は一瞬、心が明るくなるような気がした。しかし、その明るい気持は、すぐまたあの千坂牧子の毒々しい視線の想い出に追い払われてしまった。

4

翌日、私は起きるとすぐ、雪山ノブエに電話して、会いたいと言った。

私は、昨日、久我山も暗示したように、本当にこの若い歌手を好きになってしまっているのだろうか。とにかく昨夜おそく——というよりは今日の朝方近くまで、千坂牧子の意地の悪い眼つき、あの歪んだ唇、などの残像が、陰のうらにちらついて眠れなかった私は、ほとんど反射的に、気の弱い小柄な雪山ノブエに会いたくなったのだった。彼女に会うことで気を静めたかった。実際、雪山ノブエと話していると、相手の無邪気を調子に、こちらも引き入れられて、いつも気が楽になるのだったから。

私は独身だった。そして、長すぎた独身生活のために、疲れていた。心の安まる、家庭というものを持たないので、疲労の回復する時がないのだ、と思う時があっ

たが、一方で普通の夫婦よりも、なおさら、複雑な関係にある千坂牧子という女が、私の生活の半分を占領しているのだから、その千坂との長い交際に終止符をまず打たなければ、結婚などはできないし、といって、私には牧子と別れるために起るに相違ないもめごとを予想するだけでも、現状の方が、まだ楽だ、という気がしてくるのだった。

私は時々、私が毎朝、疲れきって眼を覚すのは、もっぱら千坂牧子のためなのだ、と思うことさえある。千坂の忙しい生活、そしてまた私自身のしだいにやはり忙しくなってくる生活、その二人の生活の間に、お互いの隙の時間を一致させる工夫をするのは、それだけで疲れた。それにあの強情な千坂は、そりいう時も、自分の方から時間を繰り合せるということは絶対にないのだから、かならず私の方で、むりをしなければならず、そのくせ、二三日逢わないといらなってくるのは、欲望の強い彼女の方なのだ。

だから、私は今までに何度も、いつそのこと千坂と結婚しようかと決心した。しかし、そのたびに強く反対したのは、千坂だった。彼女はひとりきりで暮し、そして時々、自分の部屋へ私を迎えるという生活に執着していた。表面はあくまで独身者であるということが、歌手と